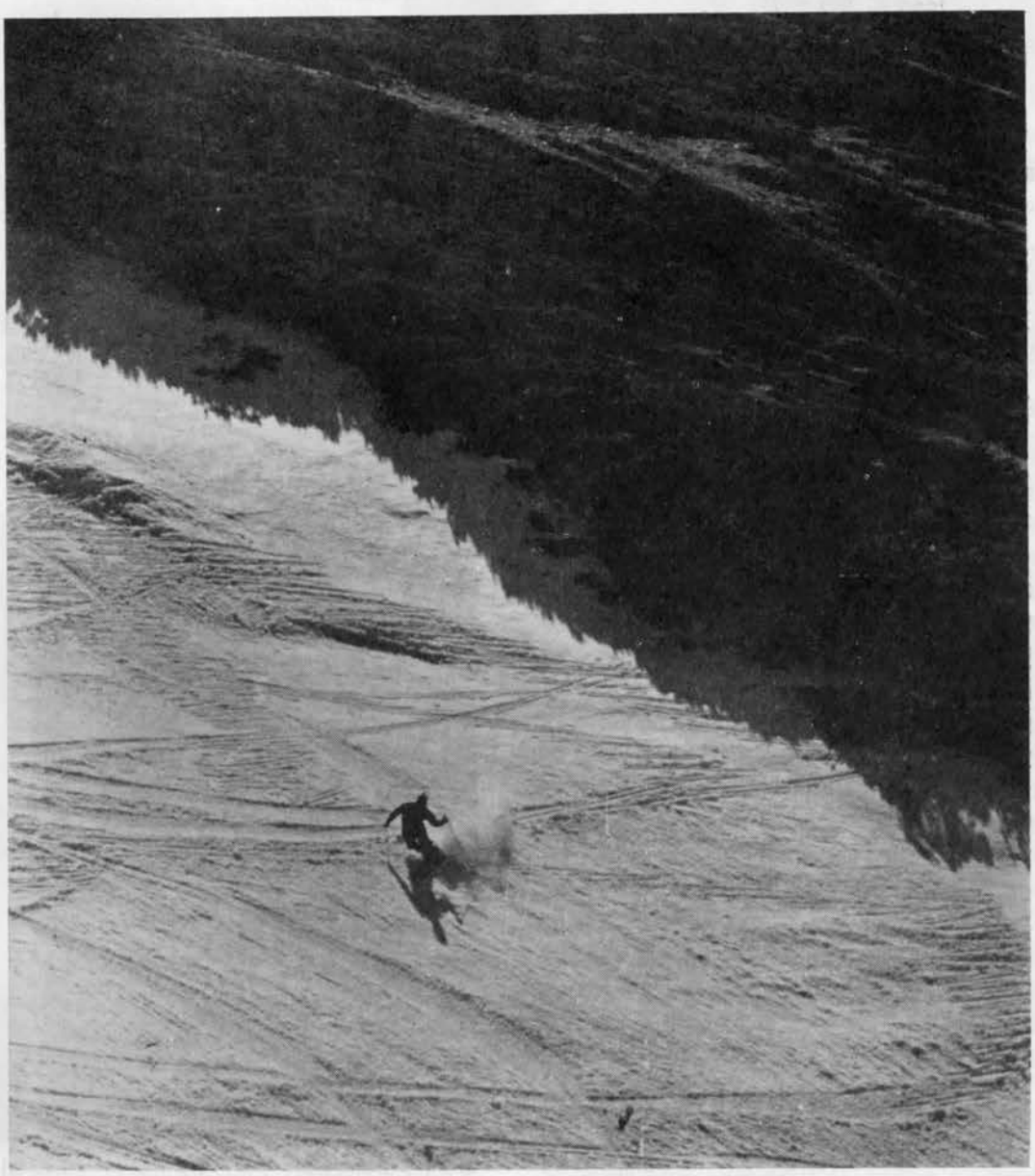
毎月1回20日発行　　第3種郵便物認可（昭和31年3月28日）　①

山と博物館

第 3 巻　第5号　1958年5月20日



五月の烏帽子岳にてスキーを楽しむ（木村なお子撮影）

大町山岳博物館

近代登山草わけのころ

志村烏嶺

日本アルプスは飛騨山脈のこと

筆者、昭和31年8月白馬頂上にて初登頂より52年目第13回登山

今日、日本北アルプスとよばれる山脈は、ナウマン氏、原田博士によって飛騨山脈と名づけられたもので、山麓の信州では一般に西嶽と呼び、普通人の登らぬ山、登ってはならない山、もし登山するものがあれば、嶽荒れがして凶才をまねくという迷信があった。古くから日本の高山には富士をはじめとして祭神があった。飛騨山脈には槍ケ岳に播竜上人が小祠を祭った外には、それより北へ日本海に没するまで祭神や登山路などがなかった。

白馬岳は大蓮華山の別名

白馬岳の名称は春、小蓮華（大日岳）の下に田ノ代をかく馬形が残雪の間に現われるので起った名称で、白馬は代馬のあて字といわれてきている。今日ハクバ山と呼ぶ人があるが全然無意味である。もともとこの山は昔から地理書、その他には大蓮華山といわれてきた。

私は博物科のほかに地誌科地文科の有資格者で地理科の教授もしていたから、地理の参考書などは当時大方よんでいたが、白馬岳の名を知ったのは、長中に赴任してからのことであった。当時、唯一の登山参考とした農省務省40万分ノ1の地形図には白馬岳の名称はなかった。明治23年発行の10万分ノ1信濃全図には信州両越の境（3041m）のところに蓮華山と白馬岳とが一峰頭に記入されまた、日本山岳史には蓮華山（朝日岳大蓮華山）標高1万35尺、白馬岳（蓮華山の一峰）標高9682尺とあるが、実際には大蓮華に支峰はない。ウエストン氏の「日本アルプス」にも明治27年、越後方面から登って大蓮華山と記してある。拙著「やま」には越中方面では大蓮華山、信州方面では白馬山というと記しておいた。古人は大蓮華と呼び近年になって信州側から多く登山するので白馬岳とよばれるようになった。

55年前の白馬登山（明治27年）

明治36年、仙台から長野中学校へ赴任後地の利を生かして植物の垂直的分布の研究を志し、信州の高山について調査したが、参考とするような資料は少なかった。37年の春、雪融けを待って、飯綱、戸隠などへ休日ごとに採集に出掛け、暑中休暇に浅間、八ケ岳、白馬に登った理科大学矢部吉禎氏の白馬植物目録を、日本植物学会の植物雑誌でみて、植物の豊富であることを知ったからである。

白馬山案内人のナンバーワン

この時の白馬登山は8月19日より前後5日間であった。この頃は登山者など全くなかった時代であったから案内人などというものは全くなかった。当時官有林見廻りをしていた丸山常吉老人の好意で、長男広太郎、同姓吉十の2人を同伴することになった。2人ともはじめての登山で、山中のもようを常吉老人から聞き案内する始末であった。それ故この2人は白馬案内人のナンバーワンといってよいと思う。

山中三日は快晴であった。濶葉単純林の喬木帯、谷を埋める大残雪、お花畑の美観、山容の豪壮、眺望の雄大さに全く魅せられ、こゝに山岳宗の洗礼を受け、一生山に

ロンドン山岳会雑誌、アルパインドジャーナル23巻1906年5月号登載、白馬が初めて欧州に紹介された写真

つかれた男となった。

この時二種の高山植物の新種を発見した。登降路の容易な女子供に登山することが出来るから、だれにでも一度はこの景色を見せたいものとの一念を発起し、この時から登山思想啓蒙に全力をつくした。

53年前、ヨーロッパに紹介された白馬の写真

高山植物に関しては、園芸界（内田老鶴圃）園芸の友（園芸同志会）何れも前田曙山主策、登山記は雑誌山岳、信濃毎日新聞、国民新聞といづれも特別寄書家として執筆。日本トルプスの著者ウオルター・ウエストン氏は園芸雑誌の口絵にのせた白馬の写真をみて、分蘖を小島、高頭両氏に依頼したので日本山岳誌の著者高頭氏がわざわざ来訪されたので、数種の写真を三氏に贈った。ウエストン氏に贈った白馬雪渓の写真は同氏の手によって英国アルプスクラブのアルパインジャーナル第二十三巻1906年5月号にのせられ、白馬がはじめてヨーロッパに紹介された。小島氏が近代登山の黎明は槍ケ岳というなら、私は近代登山の黎明は白馬からといいたい。

白馬から下山して来たら志村を打ち殺せ

白馬第一回の登山をした明治37年の夏は、29日の間降雨のない快晴であった。38年の夏は連日の悪天候であった。8月5日前田氏の一行を指導して第2回の白馬登山を試みたところ、暴風雨で山中で三日間苦しめられ白馬尻より下山した。その後連日の降雨が続いた。8月下旬第3回の登山を企て、細野部落で人夫をたずねたところこの年の荒天は志村が昔からの伝説を無視して霊域を犯したからで今年は大凶作だと信じ、誰一人として応ずる者がなかった。やむを得ず役場、駐在所などへ依頼したが、皆言を左右して応ぜずそのうち夏季休暇も終り、9月になる。やむなく神城村より人夫を六名雇い、二百十日の大荒れ日というのに登山を決行した。ふしぎに連日の悪天候もこの頃から日本晴れの好天気であった。しかし村民の意志を無視して登山したことを怒り、志村の下山を待ってブチ殺せと言う計画もあったが、登山した日から連日の雨天が一変して日本晴れの快晴に口実を失いまったく事なきをえた。今からみればうそのような話。

白馬大雪渓、山岳会雑誌『山岳』第1年第1号第1頁挿入、明治38年8月筆者撮影

鎧ケ岳温泉下方にて白馬案内人のナンバーワン、向つて左より丸山吉十、丸山広太郎、長中使丁、清水市太郎

悪絶険絶針ノ木峠

39年8月白馬第4回の登山は高頭、太平兩氏と越後から登って四ツ谷にくだった。8月7日大町対山館に投宿、すぐ針ノ木峠越えの案内人を依頼した。しかし当時は登山案内人などあるはずもなく、方々たずねたがなく、そのため8日未明出発がおくれた。（百瀬眞太郎氏は当時小学校生）、ようやく7年前に針ノ木を越えたという者があったので、他の二人の人夫と三人を雇い出発した。大町から立山温泉まで15里、2日の予定で出発した。ところが案内人は殆んど道を知らず、第一日は針ノ木を少しのぼった丸石の小屋泊りであった。小屋といってもたゞ大きな石があっただけであった。翌日の針ノ木の雪渓はけわしく白馬などのくらべものにならず相当の時間を要した。針ノ木の頂上は第二日目の正午であった。越中側は当時道らしい道は全然なかった。川田の小屋などと名はあっても小屋跡もなく人跡は全然なかった。夕ぐれに黒部川の岸につき、私が先ず籠渡しで渡り、次の太平氏は通い綱を切ってしまった。一日黒部を歩いて渡り、平の小屋についたのは第二日夜11時過ぎであった。第三日目は佐良佐良越えを、下りは林道があり、立山温泉まで4時間だという人夫の言葉を信じ、私ひとりで先

発、佐良佐良越えと思われる峠を越えて下ったところ、林道はおろか人跡も全くなく、ついに倒死を覚悟する位であった。今の人たちにはほとんど想像も出来ぬ話だ。チエンバーレン氏の日本案内記の針ノ木峠は悪絶険絶天下無比は真実であった。

日本アルプス銀座の初縦走

この年の8月19日中房温泉より有明山往復、燕岳、大天井、一ノ俣、赤沢、槍ケ岳、上高地、島々、これらはのちになって日本アルプス銀座と呼ばれた本街道の縦走であった。この年、小島烏水氏は7月常念から燕岳に縦走したが横道からであった。

この時の人夫頭は喜作新道の開設者小林喜作であった。年令30才前後の働き盛り、荷を持って自分についてあるけると思ったのはこの男だけであった。大正5年燕から高瀬に下る約束をしておいたのに同年春渡台したので実行できなかった。

明治40年から明治末年まで

1.明治40年、7月18日より1週間白馬、続いて、日本アルプス縦走（烏帽子より鷲羽まで）、東北地方、岩本山などへ登山、信濃毎日新聞に44回登山記を登載、拙書「やま」発刊。

1.明治41年、以後毎年の白馬登山は記さない。木曾御嶽駒ケ岳登山、三枝威之助氏白馬より五竜まで縦走、山岳会第一回大会、日本アルプス幻灯説明。

1.明治42年、高山植物採集法及び山岳美観発刊、早池峯鳥海山登山、辻村伊助氏槍ケ岳烏帽子岳縦走、石崎光揺氏一行初めて剱ケ岳登山。

1.明治43年、鵜殿正雄氏穂高縦走。
辻村伊助氏高瀬入りより槍へ登山。

1.明治44年、榎谷徹蔵氏鹿島槍から、針ノ木、烏帽子縦走。大谷光端伯爵白馬より槍ケ岳までの縦走大失敗。高野鷹蔵白馬裏山を黒部川まで下る。

1.明治45年8月高野氏と同行御嶽を越えて飛騨に入り、白山の裏山白川より白山越えを計画し、明治天皇崩御のため途中々止。

附言　大正2年7月30日参謀本部5万分の1日本アルプス地方の仮製版出版されて、日本アルプス地方探検時代は終る。

信州文学碑散歩

（5）

屋代東高等学校教諭　福沢武一

芭蕉句碑　埴科郡埴生町杭瀬下

転任先の屋代町へ住宅を探しに来、一応の目やすがつく。そこで句歌碑の探訪に目的をきりかえる。時に、午後三時。

屋代の隣町埴生の街道並を真西に向う。千曲川を渡って八幡へでたいのだ。どこを姨捨街道というのかは知らないけれど、そこに句碑の多いことをかねがね聞いている。

街道がきれ、千曲橋の鉄骨が見えてくる。姨捨駅の所在が山の中腹に読みとれる。その南に当って、雪のはだらな冠雪の山続きがかすんでいる。

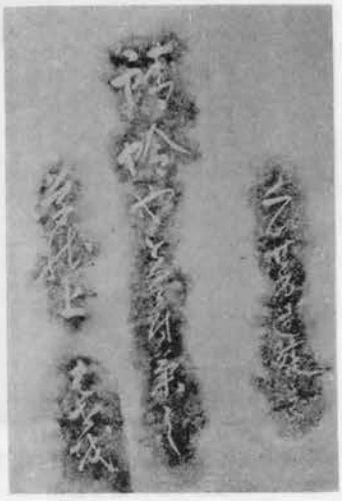
橋に近づく。と共に、川土手に大小の石碑が目に映る念のために立ち寄る。と、砂防の材料など放置された物陰に、……まぎれもなくこれは芭蕉句碑。

高さ、約1メーター。不規則な六角柱をなし、頂はぶったぎった形。肌の黒ずんだ自然石。台座は芝地の中にわずかな高さに盛り上っている。とにかく異風な一基。

川上に向かって南面の刻字は**芭蕉塚**。その筆致は中々に遵勁（しゅうけい）。右側の二面に、
蜻蛉（とんぼう）やとりつきかねし草の上　はせを

まさに当地にふさわしい一句。なぜといって、ここ堤の上は一面の草地。現に枯草が刈り捨てられ、去年の面影をとどめる。秋ともなれば、ここに赤とんぼがしきりととまっている。それを今年はたんまり眺め楽しむ機会にめぐまれる僕。なぜなら、今日きめてきた宿所からも堤の一角がのぞけていた。そこからちょっと足をのばせばこの句碑へは容易に通うことができる。

さて、碑の後ろ正面に当って**くいせけ連建之**とあり他になにも誌されていない。くいせけ（杭瀬下）は村の名。その字づらが土地柄を端的に特徴づける。杭を打ちこんだ瀬々のしもての村。そこの河原の草にとまりわずらう蜻蛉、――可憐な風物ではある。それを碑句に定着させた土地の俳連中の心根が懐しくしのばれる。察するところ、建碑は天明までさかのぼらないまでも文化文政期前かと思われる。碑はそんなに古色の濃いものがあり、現代ばなれした碑形でありもする。たまたまめぐりあわせたことが余計に僕を幸福にさせている。



ヒキガエルとその産卵

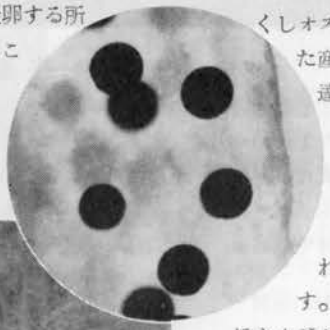
大町山岳博物館学芸委員　長沢　武

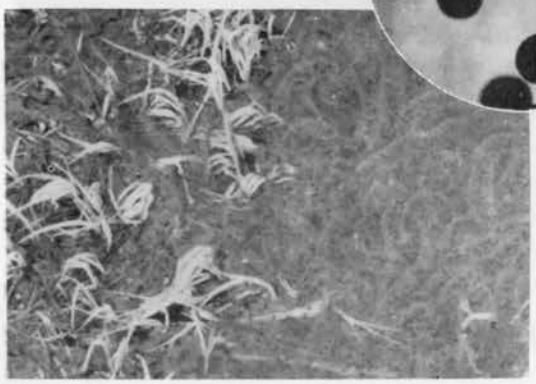
昔から「ガマの油売り」で知られているヒキガエルは広く日本全土にすんでいますが、一口にガマといわれるもので日本にすむものに、ヒキガエル、ニホンヒキガエル、エゾヒキガエルの3種があります。ヒキガエルは最もその数が多く　主として本州の中部から北部にかけて分布し、中部では山地に多いが、北部にいくにつれて平地でもみられます。

カエルは晩秋落葉の頃になると一年の生活に終止符をうって、土中や水底の泥の中の冬眠生活に入ります。ヒキガエルも秋が深まって来ると、産卵場となる湿地や窪地近くに集ってきてこゝの土穴中に冬眠します。そして翌春、桜の花の咲く頃になると冬眠から覚めます。花曇りの暖かい日中など冬眠穴の近くを通ると、土穴中より可愛らしい声で、キュルキュル、キュルキュルと愛の呼び声を上げているのを聞くことができます。

大町附近では、居谷里地方が産卵の多い場所で、この頃ここの湿地や稲尾沢の道路わきの水たまりの各所に、その卵紐をみかけます。山麓で4月中下旬に産卵するこのカエルも、高山にいくにつれてその産卵は遅くなり、八方尾根や栂池では6月下旬より7月上旬となります。

両棲類の産卵は、夜間それも雨の晩が主で、ヒキガエルも冬眠から覚めたものは、夕やみのせまる頃になると土穴を捨て産卵場である水溜りに鳴きながら集ってきます。普通数ケの卵塊をみる産卵場は、産卵最盛時の夜間は40～50匹も集るもので、沢山産卵する所ではそれこそ幾百匹も集って、昔からこの情景はガマ合戦とかカエル合戦とかいって有名です。グロテスクで大きな体をしたこのカエルが、体にも似ぬかわいらしい声をたて、愛を求めて、のそりのそりと何十匹もが産卵場をさまようありさまは、想像しただけでもこっけいです。高山ではこうした姿が日中でもみられ、道行く登山者を時たま驚かせます。さてこうして集って来た求婚者は、相手を求めて愛の抱接行為を行うのですが、世の理想である一夫一婦の結婚生活はカエルの世界では望めないのです。ヒキガエルにおいては、オスがメスよりも数倍から10倍も多いのです。そこでここでもご他聞にもれず、愛の争奪戦が行われます。一匹のメスに数匹のオスが抱接することも珍らしくなく、この争は夜の9時頃から12時頃までが最も激しいものです。幸に相手を得てしっかりと抱接したものは、いよいよ産卵行為に移ります。産卵中にも他のオスがじゃまにきますが、産卵中の一対は、姿勢を低くしオスは後肢でじゃ者まを払いのけます。そしてまた産卵を続けます。メスからはあの長い30mにも達する卵がどおして生れるのでしょうか？、体内出る時の卵紐は細いものです。その細い紐のからゼラチン質が、やがて数時間もすると水を吸収して太く長くなるのです。卵紐はメスの肛門より同時に2条から4条が生み出されるわけですが、この時にオスは精液をかけます。（体外受精という）産卵は休み休み行われ、ほとんどが午前3時頃までにはすみます。やがて東の空が白む頃には、相手を得られなかったオスもどこともなく枯草の下などに、体を後ずさりさせて自からの体を入れる穴を掘り、そこに身をかくします。そして夜が明ければ、あのすざましい愛の争奪戦も夢のように、あたりは静まり返って草々は深々と朝露にぬれ、何もなかったかのごとく朝風はカラマツの芽をゆすっています。まことに動物の世界は神のみが知るふしぎな世界です。





北安曇の民話

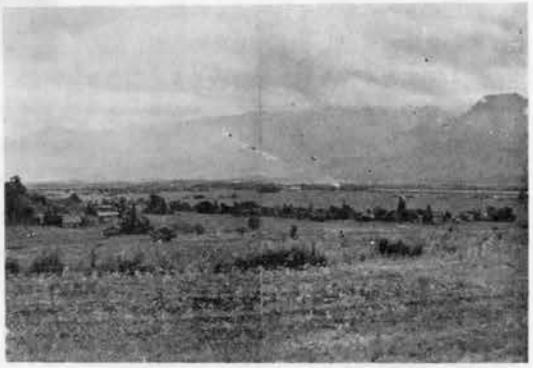
長福寺の和尚

大町南高等学校教諭　青木　治

今の池田町会染（あいそめ）区花見（けみ）部落は旧池田町の東南の東山々麓の崖錐面にできた豊かな部落です。この部落も含めた高瀬川の沖積平地は昔から水田地帯として開け、水便も良く、土地も肥沃で村人も円満で非常に幸福そうな村柄をつくっていました。村の中心には現在は公民館がありますが、昔は郷倉、観音堂、文珠院というお堂などがありました。中心地から東方へ3、4百米行った山ぎわの小高いところには、各家々の墓地が散在しています。この附近に今から約三百年前の1659年（万治2）までは長福寺という朱印5石を幕府からいただくお寺がありました。

お寺には実に権力に屈することの嫌いなごうけつ和尚が住んでいました。近くの山や森かげには、多くのきじや山鳥がすんでいました。ある秋のことでした。松本の殿様の大鳥追いがこの近く一帯でくりひろげられました。殿様の指揮のもとで大勢の家来たちが一せいに鳥追いをしました。その時一羽の山鳥が長福寺の本堂の縁の下に逃げこんできました。和尚は大音、声をはりあげて「ここは殺生禁断、徳川幕府直属の朱印地である。一歩も入ることはならぬぞ」と申し勢子（せこ）を入れず、ついに山鳥を逃がしてしまいました。和尚は幕府にこの旨訴え出ましたところ、長福寺の勝訴となりました。そこで殿様は何んとか和尚を困らせようと考え、家来に命じ朱印地外のお寺の周囲に竹やらいをつくって和尚が一歩も外へ出られぬようにしてしまいましたので、和尚は食事もできなくなりました。この時村の庄屋、遠藤重左はひそかに村人とはかり、夜、食物や薪、水を運んでこれを助けましたが、そのことがもれたため庄屋は殿様のために一家一族は潮分おかめ（潮地をとりあげられること）の罪に処せられ、村に住むことができなくなりました二人は夜逃げました。

和尚は寺の宝である頼国作の名刀で寺の釣鐘二ツを切り落し、奥の井戸に投げこんで逃げました。庄屋一家もちりぢりになりましたが、弟は祖先の墓石を背負って古厩（穂高町有明区）に落ちました。後に遠藤家は許されて村にもどったが、庄屋職は取上げられたとのことです。



（写真は花見部落の全景……手前の集落）

博物館あれこれ

①特別展連日にぎわう

4月29日より1週間本館で行われた上原遺跡と信濃考古展は好天に恵まれ、同時に行われたサクラ祭りと合わせ終始盛況裡に終了することができた。特に珍貴な数々の展示品と初めての開催とあって関心も高く、ちょうど遠足シーズンでもあり、連日郡内の小中学生団体で賑わった。入場者は3.500名を数えた。

②協議会委員きまる

本年度の博物館協議会委員が下記の通り、きまった。初回の協議会は5月17日午後2時より、本館で行われた。荒井豁、石原守明、伊東伊三郎、伊藤半二、片瀬恒喜、窪寺吉昇、小林博、坂井行信、清水千春、下川高次郎、高橋登吾、高橋恭男、田巻元美、長沢欽平、原又雄、宮坂鷹太郎、村井直人、横川安雄、横沢庄司

③学芸委員もきまる

博物館の学芸部の各部門を嘱託でお願いする学芸委員がきまりました。博物館の資料收集、調査研究、展示、普及活動などを担当して、館員とともに博物館の諸活動を推進して下さる方です。

山岳ー武田武、竹内剛久、柳沢幸治、武田睦男、地学ー矢口惣一、窪田定雄、太田昌秀、森養直、植物ー寺島虎男、中村武久、丸山晃、手塚映男、動物ー福島融、長沢武、倉田稔、長沢修介、民俗ー青木治、考古ー原田曠、歴史ー福具義、生活ー降籏良平、坂田悦男、太田忠雄、吉川宗男

④道路や水道の工事

博物館の登り口になる道路の道巾が狭く、石がゴロゴロしていて、来訪者に不便をきたしていたが、本年度予算で道巾4m50に拡張、8月末までには工事完了の予定。

日本のはくぶつかん

山階鳥類研究所

私どもの研究所は小博物館も兼ねているけれども、博物館法による博物館ではなく、研究が主体である。設立者である山階芳麿氏（当時侯爵）は昭和7年個人の研究所を設立し鳥類の研究に没頭するとともに研究用の標本図書、器具などをあつめて篤志の研究者に閲覧利用を許して来た。こうして鳥類を主とする標本は3万点に近く図書も3000冊に達したので、昭和17年に組織を改め財団法人とし、恒久性ある独立の研究所とした。しかし不幸な戦争が到来し、空襲による戦災こそ辛うじてまぬがれたが、戦後はかって経験しなかった経済的な困難を招来し、その打開に常に苦労している実状である。

研究所の規模としては東京都渋谷区南平台町49番地に360余坪の宅地を有し、そこに鉄筋コンクリート2階建（建坪63坪）の研究所と附属の家屋3棟がある。また屋上に禽舎がある。研究内容は1）細胞遺伝学、生理学的方面2）日本その他東亜諸地域の鳥類の分類地理学的研究、鳥類以外の動物の分類学的研究3）日本産野鳥の生態、保護及び利用に関する研究に大別される。今はまだ自力で運営できないのでこれらの研究調査には民間研究機関補助金、科学研究費などの交附を受け、国家の恩寵にすがり推進させている。経済的にこそ振わぬけれども戦後研究所は多方面から活潑に利用され大いに名声を博している。昭和27年、創立10周年を記念し、年2回出版の研究報告を創刊し、現在第11号まで出て頁数も400頁を超えるに到った。また所内に日本鳥類保護連盟、日本野鳥の会、日本鳥学会、動物分類学会などの学会や団体の事務所を引受け、これらへの奉仕も多く大きい。現在研究部のほうは山階所長を頭領に北大教授牧野佐二郎、高島春雄、黒田長久、平井久男、宇田川竜男諸氏を擁している。アヒルとバリケン（タイワンアヒル）種間雑種利用の研究、プロラクチンを利用す家鶏就巣性除去の研究日本産野鳥の比較核学的研究、ムクドリの蕃殖習性に関する研究などは戦後研究所が手がけたいささか誇るに足る研究である。　（高島春雄）

である。なお園内も、夜間通行ができるように、外灯（サーチライト）6コが取付けられた。

水道も飲料水だけであったが、新たに裏山より水源を求め、消火栓の使用ができる簡易水道工事が、7月初旬までには完成される。

⑤市連青と提携、新しい活動へ

山岳博物館では市内各地の公民館分館を拠点として、映画、幻灯などを利用した普及活動を行うことを計画していたが、こんど大町市連合青年団と提携してこの計画を具体化することになった。さし当って各地で「映画と話合いの会」を持つと共に、各単位青年団又は各分館ごとに幻灯スライドの自作を行うよう呼びかける。

市内50に余る分館が日頃の活動の一端をそれぞれ1巻ずつのスライドにまとめたとしても、50巻の個性ある社会教育の実践記録が出来るわけであり、今から期待されている。市連青としては各単位団の自主的活動を盛り上げることを目標としており、本館との新しい提携もこの点に主眼をおいて行なわれる。

春

金田国武

深い空を
激烈なカーブで切る
石膏の尖り
そこの蒼い
かげのたまりから
水泡が下界へくだって
陽にけぶった
白樺林の梢で光る

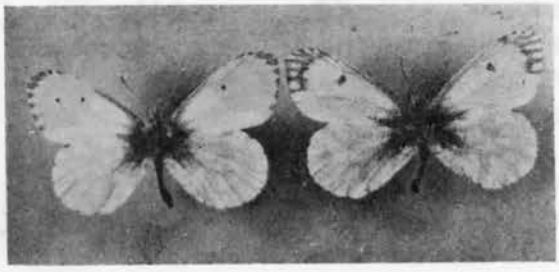
樹間
蓮華　鹿岳　五竜　……
連々と空に切り込む山をのぞくと
レンズは青く冴え
美しい人の瞳を映し
ぐるぐるぐる
ぐるぐるぐる
その中で燃えはじめる

ひとが
恋しくて恋しくて
たまらないから
今日もおれは
山に向って
あるいてゆく

保護したい昆虫 ③

クモマツマキチョウ

Anthocaris cardamines isshikii Matsumura



本種は本州中部の高山からきわめて低い山地にまで産するものであるが、最初に北アルプス山中の棒小屋乗越より採集されたので「高山蝶」の名がある

日本では中部地方の山地に限って発生するものだから昆虫愛好家や採集家の最も珍重する「種」である。

年一回の発生で、アルプス山中では5月下旬頃、山麓では5月上旬頃、本郡青木湖に源を発する姫川沿いの山地では四月下旬頃出現し、ツマキチョウの発生する場所では同種と混飛しているのが見られる

クモマツマキチョウは日本に産するシロチョウの仲間では最も美しく、その飛んでいる姿は例えようがない。雄の前翅外半はきわめて鮮かな美しいオレンヂ色をしており、このオレンヂ色がなかなか美しいのである。ところが一方雌にはこのような模ようがない。だから誰にでも、前翅外半のオレンヂ模ようで雌雄の区別をすることができる。

資料室

食草はアブラナ科のタネツケバナ類やハタザオ類が知られている。

このように美しく、珍しいので多くの採集マニアや標本屋が採集し去るので、姫川沿いの蒲原温泉附近では〝天然記念物〟にして、その保護策が講じられているほどである。

（倉田 稔）

⑥海と山を結ぶ

海と山の自然に親しみ、自然研究者の研修と相互の交歓とを目的に、本年新たに「海と山を結ぶ会」が実現されることになった。主催は信濃生物会、千葉県生物学会と本館で8月6日から2泊3日で、両県の生物愛好家たちによって、北ア山麓、白馬岳の自然観察が行われる。なお信濃生物会は本年度總会を本館を中心に大町市で開催続いて「海と山を結ぶ会」に臨む計画となっている。

⑦山の自然科学教室

夏季休暇を利用して東京都内の中学生を特色ある大自然に親しませようと、今年も昨年に続いて「山の自然科学教室」が開催されることになった。主催は大町市教育委員会、実施機関には博物館と教育大学野外研究同好会があたり、7月26日～31日までの6日間、木崎湖、居谷里（いやり）湿源、八方山を中心に行われる。参加者は中学生160名が予定され、夏季大学、黒菱ヒュッテが宿泊所となる。

⑧夏季学校も初めて

京都の帝塚山学園の小学部生徒160名、付添教師14名は7月17日～21日まで5日間木崎に泊り、仁科三湖、鹿島山麓、葛温泉方面を中心に夏季学校を開催、自然の観察などを行う。

お願い 本紙の購読御希望の方は一カ年購読料170円（郵送料とも）を現金書留または郵便替為、郵便切手で長野県大町市、大町山岳博物館宛、ご送金下さい。 大町山岳博物館

⑨準備進む黒部調査

残雪丈余の北アはまだ早春、しかし、関西電力の黒部第四発電所建設工事は、大町トンネルの開通によっていよいよ活気づいてきた。岩山ばかりで森林の発達が悪いこの地域一帯の騒々しい大型機械やハッパの連続に、安住の地を追われる動物たちはいったい何処へ行くのだろう博物館では懸案のまま常に持ち越されてきた黒部自然園開設のための基礎調査を何としても遂行しなければならない情勢に追込まれた。大町市観光審議会の呼びかけもあり、現在数次にわたる下見調査を終了して、調査計画の具体化を進めている。ダム工事進行にともなって必要にせまられる問題から着手されて行く予定であり、内容的には大町トンネル入口、籠川流域一帯の自然科学特に動物、植物、地形、地質に関する問題に力点を置き調査が進められる。

⑩山の会で遭難史まとめ

大町山の会では本年度調査活動の一環として「戦後北アルプス遭難の調査」を行うことになり、調査員15名によって始められている。調査は戦後13年間にわたって北アルプス全域の遭難を科学的に究明するわけで、新聞、雑誌、図書、会報、警察署、聞込みなどにより一ケ年間行われる。

山と博物館 第3巻第5号 1958年5月20日発行
発行所 長野県大町市TEL（大町）211
大町山岳博物館
印刷所 松本市巾上町 353
信州印刷株式会社